

活動報告書

報告者氏名:伊藤 貴晃 所属:広島県立庄原特別支援学校 記録日:平成 26 年 2 月 11 日

【対象児(群)の情報】

○学年 小学部 2 年生

○障害名 聴覚障害を併せ有する知的障害の児童

○障害と困難の内容

- ・ 発達年齢は 11 ヶ月で (KIDS 乳幼児発達検査スケール TYPE:T による), 平均聴力は, 両耳とも 90dB で, 1 年前より補聴器を装着し始めた状態で, 音を音として認知するにはいたっていない。
- ・ 物や人, カード等に注目することが難しい。
- ・ 人や物に対する関心が低く, 自分から人や物に関わり, 反応が返ってくるのを待つといった行動がみられない。また「ほしい物」「したいこと」等を伝える手段が確立できておらず, 自発的な要求も少ない。
- ・ 保護者が外国の方で, 母親は日本語を理解することが難しい。祖母は簡単な日本語ならば少し理解できるため, 連絡は祖母を通して行っているが, それでも意思の伝達が難しいこともある。

【活動目的】

○当初のねらい

- ①指導者に行きたい場所やしたい活動を伝える。
- ②iPad に写った写真やシンボルマークを見て行動することができる。
- ③画面に注目して, 触ったら画面が変化するという関係性や画面の違いに気づくことができる。
- ④家庭と連携し, 学校や家庭での様子を共有する。

○実施期間

平成 25 年 6 月～平成 26 年 2 月

・ 実施者

教諭 伊藤 貴晃

・ 実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児(群)の変化】

○対象児(群)の事前の状況

- ・ 自発的な要求が少ない。校庭に行きたくて, 窓の前に立っている等の行動が見られ始めたが, 「したいこと」「ほしい物」といった要求を人に伝える方法が確立できていない。
- ・ 人や物に対する関心が低く, 目も合いにくい。
- ・ 注視することが苦手で, 提示されたカードや具体物等を 1 秒程度見る程度だった。
- ・ 写真やシンボルマークを見て, 具体物や活動を想起することはできていない。
- ・ 触ることへの苦手さもあり, 物を持ったり, 触ったりすることに拒否を示すことが多い。
- ・ 自分から関わることで, 何らかの反応が返ってくるといった因果関係の理解ができていない。
- ・ 活動に対する持続性が低く, 続けて物事に取り組む時間が短い。
- ・ 保護者が外国の方で, 日本語を理解することが難しい。祖母は, ひらがなの日本語を少し理解でき, 簡単な日本語を話すことができる程度である。さらに, 母親との連携は直接日本語では難しく, 祖母を通して行っているが意思の伝達が難しいことが多い。連絡は, 電話や連絡帳等を通してひらがなや簡単な日本語で行っていたが, 対象児の家庭での様子や学校での様子を共有することが難しかった。

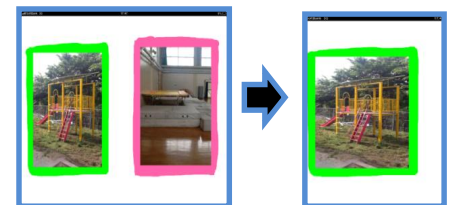
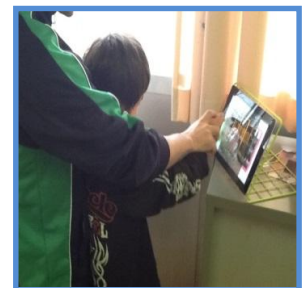
○活動の具体的内容

- ①校庭に行きたくて、窓の前に立っている等の行動が見られたので、休憩時間に行きたい場所やしたい活動を伝える手段として、「iworknote」のアプリを活用して選択する活動を行った。対象児は、聴覚障害を併せ有するため、音声による刺激のみでは、感じることも困難な様子である。そのため、視覚的な情報の理解が進むよう対象児が、選択した写真だけが表示されるようにした。また、写真での識別がまだできていないため、写真の回りに色をつけ見やすくした。しかし、当初は、iPadに触ることすらも嫌がり、画面上での変化にも気づくことができなかつたので③の課題を設定し、行った。
- ②活動の順番や内容、場所等を「写真」「keynote」を活用し提示した。提示方法としては、写真やシンボルマークに動きを付けた方が対象児にとっては、注目しやすかつた。そのため、写真やシンボルマークを提示する時は、スライド機能や手でスライドさせる等して動きを付け提示した。
- ③毎日の自立活動の時間に「Arpie」「BabyTap」といった動きのあるアプリや画面に触ると画面が変化するアプリを見たり、触ったりする時間を設定した。書見台にiPadを置き、対象児が見たり、触ったりしやすいようにした。
- ④対象児の学校での様子や連絡事項等を「Translator」「SayHi」のアプリでポルトガル語に翻訳して、それを「NoteAnytime」に貼り付け、週に1回連絡帳として活用した。「NoteAnytime」のアプリは、写真も載せることができるので、活動の説明文と一緒に載せるようにした。また、ポルトガル語にそのまま翻訳することは難しかったため、一旦英文に翻訳してからポルトガル語に変換するようにした。

○対象児(群)の事後の変化

①を通して

- 当初は画面に触ることさえ嫌がり写真に注目することもできていなかったが、③の活動や行きたい場所の意思を確認し、教員と一緒に押す活動を通して、提示された画面の写真を見ることができるようになった。体をこわばらせて拒否するような行動もなくなり教員と一緒に画面に触ることができるようになった。また、自分から手を出そうとする姿も少しずつであるが見られるようになり、行きたい場所やしたい活動の写真の方を見ることが多くなつた。



②を通して

- 身の周りのいつも触れる物や使う場所等の写真入れ置いてあるiPadを自分から持ってくるようになり、iPadに写った写真を見て、ランドセルからタオルや水筒といった具体物を指示がなくても取出すことが増えてきた。また、写真を見て健康観察を取りに行ったり、トイレに行ったりする等の行動もできるようになってきた。

③を通して

- 対象児が初期から興味をもって見ることができた「Arpie」といった、ボールのアニメーションが上下に動くアプリでは、ボールの動きを注目して見ることができるようになり、ボールの動きを目で追ったりするといったことができるようになった。物を触ったり、見たりしてする活動では持続してすることが難しかったが、「BabyTap」のような、触ると画面が変わるといったアプリでは、その変化に気付き始め、15分以上も持続してiPadを見たり、触ったりして活動することができるようになった。画面に触る様子も手を開いて主体的に自分から手を動かして触ることができるようになった。



- 他の場面でも注目したり、目で手の動きを追いかけたりすることが増え、指示が伝わりやすくなってきた。

④を通して

- iPad を連絡帳として活用したことで、祖母だけでなく家庭に学校での様子や活動を伝えることができた。また、対象児の変容についても家庭に伝えることができた。
- 保護者の方も、家庭での様子を動画や写真で知らせてくれるようになり、対象児の家庭での様子やテレビ等の映像を見るようになった等の家庭での変化を知ることができた。
- 保護者との懇談等では、日本語では難しい言葉を翻訳して伝えることで、母親も自分の iPhone を使って伝えようとする姿も見られるようになり、祖母との話だけではなく、母親とも話をするようになった。



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- 対象児にとっては、動きのあるアプリや画面を触ることで画面が変化するというアプリを見たり、触ったりする活動等を通して、「iworknote」に提示された写真を注目することができるようになったと感じられる。また、画面に触ることで、「行きたい場所」「したい活動」が得られるという実感を通して、画面に触ることへの抵抗感も無くなり、手を出そうとする姿も見られるようになってきたと考えられる。さらに、この経験を通して、選択した写真を見て、その場所を想起できるようになってきたと感じられる。iPad の画面に注目することができるようになったことで、触ると画面が変化するという因果関係や画面の違いに気づきづくことができたと感じられる。

○エビデンス

- iPad に写った、動きのあるアプリや写真、シンボルマーク等に注目することができるようになったことで、画面の違いに気付くことができ、画面に触ることで画面が変化するという関係性に気付くことができた。そのため、「iworknote」の画面に触ることで、画面が変わり「行きたい場所」や「したい活動」が得られるという実感に繋がったと考えられる。

○今後の取組

- これまで対象児には、自分の「したいこと」「ほしい物」を相手に伝えるようになってほしいという思いで取り組んできた。例えば、iPad で「校庭」と「体育館」の写真を表示し選択することで、意思表示ができるようになってほしいと取り組んだ。しかし、対象児にとって2者選択は困難であった。今後の取組としては、まず写真を一つにして、それをタッチすることでしたいことやほしいものが得られる経験を積み重ねることから始めてみたい。また、写真をタッチすれば、それに関係した音声の流れたり、シンボルマークが表示されたり、それが得られるといった反応を対象児に返すことによって、理解を促したり、次の活動への意欲づけにしていきたい。
- 現在、写真を見て想起できる活動や具体物が増えてきている。そのため、今後も想起できるもの増やしていきたい。その取組として、iPad の写真機能を活用し、対象児が、実際に見たり、触ったり経験したものを写真にして、その場で振り返る場面を多く設定していきたい。
- 家庭との連携では、家庭からの情報を受信する環境に課題あったと考えられる。そのため、家族の方が母国言語でも思いを発信できる環境を整えていきたい。例えば、SNS を活用した連絡ならば、翻訳アプリを活用することもできるので、翻訳に時間を取られることなく連絡を行うことができると考えられる。

○その他エピソード（画像などを含めて）

- iPad を連絡帳として活用したことで、対象児の学校での様子や活動の内容を家族で見たり、読んだりすることができて良かったという言葉がいただくことができた。
- 肘が机の上に乗っておらず、手も位置も机の下にある姿勢が、iPad を自分から触るようになったことで、机の上に手を置き、肘で体重を支えるようになり、顔も前を向くようになった。このことで、他の活動でも机の上に手を置き活動することが多くなり、手の操作性が向上した。

